

---

# 私の夢

なめねこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の夢

### 【ZPDF】

N6703D

### 【作者名】

なめねこ

### 【あらすじ】

泣けるかわからぬじけ顔をと読みでください。

## 理由（前書き）

これは90%実話です。

## 理由

私の名前は中屋 香織

私は昔からナースになることを決めていました。

なぜナースにならうと思ったかといつと、あれは私が小学5年生のときのことです。

その当時、私はバスケが大好きでバスケ少年団に入っていました。恥ずかしい話、このときの私の夢はバスケット選手になることでした。

私は毎日のようにバスケをしました。

上手くはありませんでしたが楽しくて夜遅くまでやっていました・・・あの日の夜も

私は練習が終わつた後に自主練習をしていました。

そして1時間程練習をしていると監督に

「おーい、そろそろ終わりにしろー」

「と聞かれたので練習を終えて家に電話をしてむかえに来てもらひつ

ことにしました。

しかしながら電話に出てくれなく、諦めかけたときにもうと電話  
がつながりました。

電話に出たのはおばあちゃんで親はまだ仕事から帰つて来ていない  
よひでした。

私は早く帰つたかったのでおばあちゃんにむかえさせてもらひつ  
にしました。

おばあちゃんは5分程でむかえにきてくれました。私はもう少ししか  
かないとおもて近くのコンビニに行つてしまつました。

私はおばあちゃんがむかえにきてることを友達からわざわざいで戻  
りました。

そして私はおばあちゃんの車に乗り謝りました。  
おばあちゃんは笑つて許してくれました。

家に着くと私は着替えをすまし休んでいました。

おばあちゃんはおじこちゃんがお風呂に入つてゐる」といふ様子を見に行きました。

するとおばあちゃんは突然悲鳴をあげて私を呼びました。

風呂場についた私はおばあちゃんがおじこちゃんをお風呂から出しているのを見ました。

最初はのぼせたのかと思つていたがおばあちゃんは

「早く救急車呼んで……」

つと大声で言つてきたので私は半泣きで救急車を呼びました。

その後救急車がくるまで私はおじこちゃんを揺すつたり声をかけましたが反応はなく、おばあちゃんは心臓マッサージをするが上手くいかず時間だけがむなしくすぎていきました。

救急車が来たと同時に親も帰つてきて、一緒に救急車に乗つて行つてしましました。

私は留守番をするよう頼まれました。

そしておじこちゃんが帰つて来ることを祈りました。

ずっと

ずっと

すると突然電話が鳴った。

出てみると母からでした。母は

「おじこちゃん・・・やつぱりダメだつたみたい・・・心臓発作で・・・医師は・・・もつ少し発見が早ければ・・・おじこちゃん・・・」

母は泣くのをじりえながら私に言つてくれた。

私は電話を切るとそのまま部屋に行きベットに横になつた。

全て夢だった。そうなることを祈つた。

そうならないことはわかっていても頭がついていかない。もし自主練習なんかしなければ・・・もしコンビ二なんかに行かなければ・・・もしバスケなんかしないでいれば・・・

おじこちゃんは死なずにすんだ

そつ考えると涙がとまらなかつた。

私はそのまま眠りについた。

次の日、目が覚めると私は急いでおじいちゃんの部屋に行つた。  
いるはずないのに、  
それでも昨日の祈りが神様に通じたかも知れないと思いでドアを開けた。

しかしそこにはおじいちゃんの姿はなく、おばあちゃんが抜け殻の  
ように座つていた。

私はおばあちゃんに泣きながら謝つた。

私が早く家に帰つていればおじいちゃんは死なずにすんだ・・・・

おばあちゃんは昨日ぐらみの中でみせた顔と同じ顔で私を許してくれた。

でも昨日とちがって今日は目から涙がでているようなきがした。

私はこのときからバスケ選手から看護師になることを決めました。

## 想い

あれから何十年たつただろうか。

私は今ではもうあの時に苦しむことはなくなりました。  
しかしながら思い出したりもしてしまう。

でも悲しんだりはしません。

悲しんだりおばあちゃんを不安にわかるかもしれません。

おじこちゃんに叱られるかもしね。

だから私は看護師になつておじこちゃんに

「あの時は」「めんなさい。

おじこちゃん、助けられなかつたからおばあちゃんは助けてみせる  
から見ててね」

と言つた。

おばあちゃんの頃元気がないよつて見える。

もしかしたら私のことを恨んでいるのかも知れない。

でも私はおばあちゃんを助けて見せる。そう神様に誓つた。

私は明日から看護師として病院で働きます。

地元の小さい病院ではありますが夢をかなえることができました。  
私は仏壇でおじいちゃんに報告をしました。

飾つてある写真はとても笑顔でいつも元気をもらいました。

そして次の日私は病院にいました。

仕事初日はさすがに大変でした。

いろんな患者さんがいて正直続けられるか不安でした。

でも仏壇でおじいちゃんの顔を見るとそんな不安もなくなり元気になりました。

病院の仕事にもなれ、楽しみを覚えながら何ヶ月もたつたときそれは突然起きた。

おばあちゃんが突然氣を失つて倒れた。

私はその日はたまたま休みで友達と遊んでいました。

母からの電話に私は驚きました。

そしてすぐに病院に駆け付けました。

病室についた私はドアを勢いよくあけて中に入りました。

おばあちゃんはベットに横になつていました。

私は絶望しました。

そしておばあちゃんに近付き泣き声になつになりましたがおばあちゃんは・・・寝ているだけでした。

私は落ち着いて周りを見ました。すると母は笑いながら

「大丈夫よ。ただ疲れてただけだから、医師もたぶん過労だつて言つてたし。2、3日で退院できるつて」

私はその言葉を聞いて安心しました。

それから毎日のように私はおばあちゃんの部屋に行つた。

しかしおばあちゃんはいつも少しおひるの顔をしていました。

私は最初、すぐつかれていたんだと思つてこたけど何日たつても  
つらこ顔はとれることはありませんでした。

おばあちゃんに話しかけても

「ああ」とか

「んづか」とかしか言つてくれず、時には無視しているのか、なに  
も話してくれないと私もありました。

私はもしかしてあの時のことをまだ怒つているのだと思いました。

いや、やつとしか思えない。

なぜならあれ以来私はおばあちゃんの笑顔を見たことがないからで

ある。

おじいちゃんが死んでから私はおばあちゃんの部屋を覗きに行つたことがあるがおばあちゃんはノートみたいな物を手に持ちながら泣いていた姿を何度も見たことがあるからである。

私はおばあちゃんの病室に立つことがつらくなつ、余計立つことが減つてしまつた。

そんなある日私は妙な胸騒ぎがしました。

しかしそれが何なのかはわかりませんでした。

そして数時間後なにやら騒がしいことに気が付きました。

私は仲のよかつた同僚に何があつたの聞いてみました。

同僚は私を見た瞬間驚いた顔をしていました。

そして口を震わせながら言いました。

「あ、あなたのおばあちゃんが突然苦しみだして意識不明だって・・・  
・・・」

私は同僚が話し終わる前に急いで病室に向かいました。

病室には医師がいました。

しかしながら、だけ時間がとまっているかのように誰も動いていませんでした。

セントラルクリニックの顔には白い布が掛けられていました。

「あれ、あの胸騒ぎは……おばあちゃん……だったの？」

私は……なんのために看護師なったのだ？

おばあちゃんが近くにいたながら私はなにもできなかった。

私はおまえがやつのためになにもしてあげられなかつた。

そして私は泣き続けた。

布をひとくちあわせたり黒のサリにてみこゑの顔をしてしまつた。

私はおまえがやつの憂つたれを忘れてしまつた。

おまえがやつの憂つたれを忘れてしまつた。

優しく許してくれました。

私はその日、田舎の友達の病倒したことでした。

おばあちゃんの手は冷たくなってしまった。

私は涙や鼻水が止まり、手帳でふいとしたが無くなりました。

ました。

おひいき探しで、手帳の手帳が2冊あることに気が付きました。

一冊はボロボロのハートで、一冊は真新しいハートでした。

表紙には「田代」とかかっていました。

私はボロボロのノートを手に取りました。

そのノートは見覚えのあるノートでした。

やつ。それは田代あきちゃんが泣きながら持っていたノートでした。

私は中身を見てみました。

それはおじこひちゃんが書いたものでした。

19××年 7月10日

今日も香織は夜遅くに帰つて來た。

少し疲れてるようだつたがいつものように肩を揉んでくれた。

本当にいい子だ。

19××年 7月11日

今日も香織は夜遅くに帰つて來た。

いつもの笑顔で肩を揉んでくれた。

バスケット選手になると黙っていた。

香織ならなれるだろ？

わしががんばれと言つたら笑顔で頑張ると言つてくれた。

本当にいい子だ。

19××年 7月25日

今日はずいぶんと帰るのが遅い。

ばあさんがつこさつき香織をむかえに行つた。

バスケット選手になりたいと言つたあの日から毎日帰るのが遅くなつた。

よく頑張る子だ。

バスケット選手になつた香織の姿が見てみたい。

これからもどんなに辛いことがあっても続けて欲しい。

これ以降は白紙だった。

私はおじこちやんがこんなに応援してくれていたのに気付くことが

できなかつた。

おじこちゃんに会いたい。

会つて謝りたい。

おじこちゃんはいつも私のことを考えててくれていたのに私は・・・  
・・・私はなにもしてあげられなかつた。

私は泣き続けた。

そして気が付いた。なぜこんなにノートがボロボロなのかを。

わひとおばあかやんはおじこかやんの日記を見つけ、ボロボロにな  
るまで読み続けたんだと思ひ。

私はなんとか落ち着きを取り戻し、次の日記を手に取りました。

開くとそれはおばあかやんが書いた物でした。

19xx年

7月26日

朝、目が覚めた。やはりおじいさんはないなかつた。

香織が泣きながら謝つていた。香織は悪くないのに・・・

大丈夫だよつて言つたら香織は泣きながら笑つてあつがとうつて言つた。

本当に優しい子だ。

19××年 7月26日

香織がバスケットをやめてしまった。

元気も無くなつたよつてみえる。

元気になつてほしい。

19××年

7月27日

おじいちゃんの日記を見つけた。

おじいちゃんに申し訳ない。

香織にバスケットをやらないのか聞いてみた。

香織は看護師になると言った。

おじいちゃん・・・・すみません。でも香織が決めたことだから応援します。

看護師さんが私はもうながくないといつていていた。

200×年 5月13日

体が重く上手く動かない。  
でも香織の姿をみれば幸せである。

200×年 5月14日

香織が話し掛けてくれた。

でも、もう上手くしゃべることすらできない。

200×年 5月15日

香織は知つてゐるのだからか。

香織に会いたいけどこの頃会いに来る回数が減つた。

頑張つていろんだろう。

200×年 5月16日

もう てがうじかなくなつてきた。

につけはもうかけないだろう。

やるにかおりにあいたい。

ありがとうといいたい。

かおり・・・・・・がんばつて。



私は泣いた。泣き続けた。

おばあちゃんは私のことちゃんと呼んでいたのに私は最期まで気が付いてあげられなかつた。

おばあちゃん・・・・・・ありがとう。

私、おばあちゃんになにもしてあげれなかつたけど、おばあちゃんのこと大好きだつたよ。

おばあちゃん、おじいちゃん、今までありがとうございました。  
・・・・・・・・・私、どんなに辛いことがあっても頑張るから、  
見ててね。

完

## 想い（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。まだおじいちゃん、おばあちゃんのこる人はまだ間に合ひのでどんどん話し掛け下さい。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6703d/>

---

私の夢

2010年12月2日01時45分発行